

## 礼拝のしおり (2022年12月号)

～主の御前に一つにされて～

神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。

(ヘブライ人への手紙 1章 1～2節前半)

主の聖名を讃美いたします。2022年も最後の月となりました。クリスマスへと向かう時の中で、この1年を振り返る人も多くおられることでしょう。

先月、高井戸教会の教会員であった松居直さんが召天されました。福音館書店で長く働かれ、特に多くの絵本が子どもたちに届けられるために大きな働きを担われた方でした。

松居直さんのことを思い起こす時に、すぐに私の心に浮かんでくる聖書の御言葉は、ヨハネによる福音書第1章の冒頭に記された御言葉です。「初めに言があった。言は神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった」(ヨハネによる福音書第1章 1～3節)。松居直さんは、同志社大学に在学中、チャペルでの礼拝において、このヨハネ福音書の冒頭の御言葉が牧師によって朗読されるのをお聞きになった。その朗読された御言葉に深く心打たれて、教会に行くようになられたのでした。

そのことが私の心のうちにあったからでもあると思います。ご自宅に伺わせていただいた折りに、その訪問を終えるところで、私が聖書の御言葉を読み、お祈りをするのですが、何かいつもと違う緊張感が私の中に生じるのを禁じ得ませんでした。しかし、聖書の御言葉を読み、祈り終えると、松居さんから私の訪問を喜び、感謝する言葉をいつもいただいて、ほっとするような思いになりました。ヨハネ福音書の冒頭の御言葉は、いつしか私にとって、聖書の御言葉を朗読する時、その朗読がどのようなものになっているか、時に省みることを促す御言葉ともなりました。

もちろん、そのような私の思いをはるかに超えて、松居直さんは、ヨハネ福音書の冒頭の御言葉から一つの深いインスピレーションというべきものを与えられて、「ことば」というもの、「ことばの世界」を深く探求され、そこに全生涯を賭けていかれることとなりました。

今から11年前、高井戸教会の附属幼稚園である角笛幼稚園の創立50年の記念の時に、松居直さんに講演をしていただいた時のことを、また思い返します。その講演の中で、松居さんは、「この世界は言葉で出来ています。言葉に満ち溢れています」と言われました。私は、その言葉をとても新鮮な思いで聴いたことを覚えています。しかし、またその講演の中で、「今は言葉が消えていつている時代です」ともおっしゃいました。テレビ等を通して耳に入ってくる「機械語」が満ち溢れて、真実な意味での「ことば」が消えていつている。そのことを指摘なさいました。

その講演会とは別の機会に、松居さんに私がある質問をした際のこと、私の心のうちに深く残るものとなっています。その質問とは、「デジタル書籍についてどう思われますか」という質問でした。私のその質問を聞かれると、それまでにこやかにされていた松居さんの表情は一気に曇って、しばし沈黙なさいました。そして、「イエスさまは、本をお書きになったのでしょうか？」とひとことだけ言われたのでした。私は、愚問を発したと気づかされました。松居直という方にとって、「ことば」とは単なる文字ではない。語られ、聞かれるもの。人と人を深くつなぐもの。そして、神さまと人間をつなぐもの。そういう生きたもの。それを、ある意味で機械語の最たるものとも言えるデジタル書籍などに置き換えられないでしょう、と言われたのだと思いました。

「神は、…この終わりの時代には、御子によって語られました」とヘブライ人への手紙はその冒頭で述べています。御子イエス・キリストを通して、神さまの生きた語りかけとしての「ことば」が私たちに聞こえてくる。御子が私たちの救いのために人となって来てくださったクリスマスの喜びの知らせが、日本また世界において響き渡りますように。その神さまからの語りかけを生きた「ことば」として、教会が伝えることができますように。そのことを祈り願っています。



アドベントを迎え、教会のツリーに明りが灯りました。

☆12月18日～1月8日の主日礼拝、その他について（お読みください）

礼拝の予定	聖書・説教題	交読文	讃美歌 21
12月18日（日） 待降節第四主日	イザヤ書 43章 19～25節 ルカによる福音書 1章 67～80節 「あけぼのの光が我らを訪れ」	詩編 115編	241, 236, 149, 28
12月25日（日） クリスマス礼拝	イザヤ書 7章 13～14節 マタイによる福音書 1章 18～25節 「神が共にいてくださる」	詩編 98編	262, 255, 81, 26
1月1日（日） 新年礼拝	詩編 130編 1～8節 ヨハネによる福音書 3章 16節 「わたしの魂は主を待ち望む」	詩編 96編	268, 367, 81, 26
1月8日（日）	詩編 121編 1～8節 ヘブライ人への手紙 4章 14～16節 「わたしの助けはどこから来るのか」	詩編 102編	353, 467, 510, 27

12月18日以降の高井戸教会の主日礼拝等について、以下にご案内いたします。ただし、感染状況に大きな変化がある場合には、以下の記載とは変わってくる可能性もあります。その点をご了承ください。なお、変更する場合は、高井戸教会の週報やホームページでお伝えするよういたします。

#### ◎主日礼拝について

主日の礼拝については現在、1回の礼拝(午前10時30分開始)に戻っています。どうぞ開始時間について、お間違えのないようご出席ください。

なお、手指の消毒、ディスタンスをとっての着席、マスクの着用等の感染対策は続けていますが、感染に不安のある方、体調の優れない方は無理をなさらず、ご自宅で礼拝をお捧げください。

毎月第1日曜日の礼拝においては、聖餐式を行います(安全を期して、市販の聖餐用の個包装のウエハースとぶどう液を用います)。また、12月25日のクリスマス礼拝においても聖餐式を行います。

毎主日の礼拝のライブ配信（礼拝の生中継）も続けて行っていますので、ご自宅において動画を視聴しながら礼拝を捧げることができます。ライブ配信を視聴したい方は、高井戸教会までご連絡ください（TEL 03-3333-2465）。

また、礼拝説教の動画のアップロード、『礼拝のしおり』の発行も続けています。どうぞご利用ください。

#### ◎クリスマスについて

12月25日(日)午前10時30分からの主日礼拝をクリスマス礼拝として捧げます。なお、3年前まで毎年12月24日の夜に行ってきたクリスマス讃美礼拝は、今年も中止といたします。大変残念ですが、感染のリスク等を考慮しての判断ですので、ご了承ください。

#### ◎子どもの教会について

幼小科は、毎日曜日午前9時から行っています。礼拝堂で礼拝を捧げ、9時20分より分級を行います。幼小科の分級は礼拝後、1階大集会室において、また同じ時間帯に父母分級が1階小会室において行われます。ただし、幼小科は、1月1日、1月8日は冬休みです。2023年は、1月15日から始まります。なお、12月25日の幼小科の礼拝は、クリスマス礼拝です。

中高科は、毎日曜日午前9時30分より、2階会議室において行っています。

#### ◎オンライン祈禱会について

Zoomというアプリを用いてのオンライン祈禱会を、毎月1回(第1日曜日の午後5時より)行っています。

**「神がお建てになる家」**（詩編 127 編 1～5 節） **牧師 七條真明**

高井戸教会では、毎年 11 月の第 1 主日に捧げる礼拝を、献堂記念礼拝として捧げています。もともとは新宿の角筈の地で生まれた一つの教会が、1961 年に場所を杉並区高井戸に移して歩むことになった。その 1961 年の 11 月 5 日、11 月の第 1 主日の午後に新たな会堂の献堂式が行われた。そのことを記念して、高井戸教会では、毎年 11 月の第 1 主日の礼拝を献堂記念礼拝として位置付けて捧げてきたのです。

今年は、高井戸の地に献堂がなされてから 61 年になります。高井戸教会の 61 年に及ぶ歩み、そしてさらにその歴史は、新宿の角筈の地に、1891 年 10 月 29 日、日本基督教会角筈村講義所が開設された、そのところにまで遡ることができます。

長い年月を経て、一つの教会が建て上げられてきたのです。しかし、ここで「教会が建て上げられてきた」という時に、それが意味しているのは、建物としてのこの教会堂のことではありません。主イエス・キリストを信じる信仰者たちの群れ、信仰の共同体としての教会のことです。今から 131 年前、角筈の地に植えられた小さな木の苗のようなキリスト者たちの群れが、高井戸の地に移し替えられ、この地に根ざしながら育ち、建て上げられ、現在に至っているのです。そのような一つの教会の歴史において、今はもう地上にはいない多くの人たちの、主に従って共に教会に生きた歩み、主に仕えてなされた奉仕があったことを忘れる訳にはいきません。

けれども、一本の木の苗が植えられ、それが育ち、大きな木となっていくことは、木の苗を植える人やその木が育ち行くために世話をする人のなすことだけでそれが可能となる訳ではありません。何よりも、太陽の光と、空から降る雨、また土からの養分などがもたらされなければなりません。人間の力の及ばないところから来るものがあってこそ、木は育っていきます。そして、そのことは、教会の歩みにも当てはまることです。

旧約聖書の詩編第 127 編は、このような言葉から始まります。「主御自身が建ててくださるのでなければ、家を建てる人の労苦はむなしい」。家を建てるということ、そのことについて語られ、それに続けて、町を守ること、また「朝早く起き、夜遅く休み、焦慮してパンを食べる」こと、つまり仕事をするということが語られます。家を建てること、町を守ること、仕事をする、その三つのことがここで取り上げられる。しかし、それら三つのことに対して、「むなしい」「むなしさ」という言葉が三回繰り返されて出て来ることが深く心に留まります。

家を建てる。それは建物としての家を建てるということを含んでしようけれども、むしろその家の中で営まれる家庭を築くことを表していると言えます。それと共に、一つひとつの家、家庭が置かれる町、その地域が守られるということ、そして、仕事をする。それらは、私たちの日常生活に深く関わる人間の営みを表しているのだと思います。

それら人間の日常的な営み、またその日々の積み重ねが、私たちの人生そのものだと言えるかもしれません。しかし、それは、ある一つのことを知ることがなかったなら、すべて空しきこととして終わるしかない。この詩編は、そのことを私たちに示します。

ある一つのことを知ることがなかったら、という「あること」「一つのこと」とは何か。それは、主なる神さまがなさることだけが真実に、本当の意味で確かと言える実りを生み、確かなこととして残り、永続する、永遠に続くのだということ。そのことを知らなかったら、私たち人間が、どれほど、家を建て、家庭を築く努力をなし、また町を一切の危険から守ろうとしたとしても、そして生活のために寸暇を惜しむようにして仕事をしたとしても、それは結局は空しく終わるほかはない。言い換えれば、神なしに、日常生活を、そして人生を、自分の手で揺るがない確かなものにしようという企ては、どこかで空しさと結びつかざるを得ない、ということです。

2 節に、「朝早く起き、夜おそく休み、焦慮してパンを食べる人よ、それは、むなしいことではないか、主は愛する人に眠りをお与えになるのだから」とあります。「主は愛する人に眠りをお与えになる」。「眠り」というのは、人間が活動をやめることとも言えます。人間が積極的に活動することの対局にある、もっとも消極的なこと。それが眠り、眠ることだとも言える。しかし、その眠り、眠ることが、実は、主なる神さまがなさることに信頼する、神さまが守ってくださることに信頼する、そういう人間の姿を表している。そういうことではないか。

小さな木の苗を植える。100 年以上の時を経て、それが大きく育って、やがて家を建てるために用いられるものになる。きっと植林をする人は、木についての知識を豊かに持ち、また人間が出来る限りのさまざまなことをするのでしようけれども、木は一瞬のうちに成長して大きくなる訳ではない。待たなければならないのです。小さな苗が育ち、大きく成長していく。そのことを信じて待つことが大事になる。一つの教会が建て上げられて行くのも、それと同じです。主御自身が建ててくださることに信頼して、私たちは主に仕えていくのです。